

聖書：ガラテヤ 5：1～6

説教題：ただ一つ大事なこと

日時：2013年4月14日

聖書の中には読んだ瞬間にハッとさせられ、正しい立場へ引き戻してくれる力強い御言葉が、それぞれにとって色々あると思います。このガラテヤ 5 章 1 節は私にとってそういう御言葉の一つです。キリストは私たちに自由を得させるために私たちを解放してくださいました。なのに、私たちは以前の奴隷生活に戻りやすい。しかも自分から。それは何と愚かなことであろうか、ということです。ここで言われている自由とは一言で言えば、律法からの自由です。神に義と認められ、救っていただくために律法にかなう良い行ないを積み上げていこうとするあり方からの自由です。確かに律法を完全に守り行なえるなら、私たちはいのちを得ることができます。しかし私たちは罪の状態にあって、そのなすこと、話すこと、思うことのすべてに罪のしみがあります。そして私たちにはすでに犯した多くの罪があります。そんな状態で自分の良い行ないをもって神に受け入れられようとする生活は、苦しい生活であり、望みが持てない生活であり、また奴隷の生活でした。

しかしキリストはその状態から私たちを解放し、自由を得させてくださいました。それはこれまで見て来た通り、一つには私たちの代わりに完全に律法を守る 100 点満点の義を備えてくださることによって、そしてもう一つには私たちの身代わりに十字架の呪いの木について、すべての負債を払ってくださることによってです。こうして私たちはキリストにあって律法の要求を完全に満たした者とされて、その束縛から、その呪いから自由な者とされたのです。そしてはや神のさばきを恐れなくて良い自由、良心の責めから永遠に解放されたすがすがしい自由、また神に受け入れられていることを心から喜び、大胆に神に近づき、神と交わる自由に生かされた。

ところがそんな私たちがこの自由を捨てて、再び奴隷の状態へと逆戻りしやすい。キリストが奴隷のくびきを外して自由人にしてくださったのに、自分から再び重たい奴隷のくびきを自分の首にかけて、自分を苦しめる生活へ進んで行きやすい。具体的には律法を守り、自分の良い行ないをもって、神に受け入れられようとする生き方に戻ることです。私たちはそれだけ、自分の行ないに基づかせる形で、神の救いを得ようとする傾向が強いということでしょう。パウロはそんな私たちに、またと奴隷のくびきを負わされないように！すなわちイエス・キリストへの信仰に生き続けよ！と言います。それこそが私たちにとってただ一つの大事なことである、と彼は言いたいのです。

パウロは 2～4 節で、律法による生き方は結局、何を意味するのかについて述べています。ガラテヤ人たちはユダヤ主義者たちによって、救いのためにはキリストへの信仰だけでなく、割礼を受ける必要がある、またユダヤ人の様々な律法を守る必要がある、と教えられ、その道に踏み出そうとしていました。しかしそれは何を意味するかについてパウロは三つの警告を述

べています。まず一つ目は2節にあります、「もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もない」ということです。救いのために割礼を受けるということは、キリストのみわざだけでは不十分であるという立場を取っていることとなります。そういう人は結局、自分はいかにして自分の救いを完成させるのか、という自分の行ないに関心を向けるようになります。そうして結局はキリストのみわざを軽んじ、過小評価し、感謝もしなくなります。そういう人はキリストから何の益も受けない人になってしまいます。

二つ目の警告は3節：「割礼を受けるすべての人に、私は再びあかしします。その人は律法の全体を行なう義務があります。」 救いのために割礼を受けようとする人は、割礼だけですべてが終わると思ってはなりません。自分の行ないによって救われようとする人は、律法の全体を完全に守る必要があります。パウロは3章10節で旧約聖書を引用し、「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、呪われる。」と述べました。ですから割礼を受ける人は、大変な重荷を自分の人生に背負うこととなります。重荷どころか、ほぼ絶望的な道を自ら選択して進むことを意味するのです。

三つ目の警告は4節：「律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。」 ここに示されていることは、律法によって義と認められようとするあり方と、キリストにあって義と認められようとするあり方は、相反する二者択一の道であるということです。ですからもし律法によって義と認められようとする人は、キリストから離れる道を進んでいる。そして、キリストから離れるなら、それは神の恵みから落ちることを意味するということです。何と恐ろしいことでしょうか。救いのために割礼を受けることは、正しい信仰にちょっと付け足すことではないのです。それはキリストと相反する道を行くことであり、神が用意された祝福とは別の道を行くことであり、恵みから落ちる道を行くことなのです。

こう述べてパウロは、それとは対照的な、キリストにより頼む信仰の立場について5～6節で語ります。まず5節で語られていることは、信仰によって生きる人の特徴についてです。それは律法によって歩む人とは対照的な、望みにあふれた生活ということです。新改訳では「義をいただく望み」と訳されていますが、原文では「義の望み」とだけ記されています。この解釈には二つの可能性があります。一つは新改訳のように「義を頂く望み」という理解です。この場合、義は将来頂くものであって、今はまだ頂いていないということになります。とすると、信仰によって今ここで義とされているというメッセージとどう調和するのか、という疑問が生じます。その場合、将来いただく義とは完全な義の状態であって、今ここでの義認とは区別される、ということになるでしょう。もう一つの理解は、「義の望み」とは「義がもたらす望み」というものです。新共同訳聖書はこちらの理解に立って、ここを「義とされた者の希望が実現すること」と訳しています。確かに義とされた者には素晴らしい将来が開けていることについて、聖書の他の箇所でも語られています。たとえばローマ5章1～2節：「信仰によって義と認められた私たちは、私たちの主イエス・キリストによって、神との平和を持っています。また

キリストによって、いま私たちの立っているこの恵みに信仰によって導き入れられた私たちは、神の栄光を望んで大いに喜んでいます。」 またローマ書 8 章 30 節：「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」 こういう望みを、信仰によって義とされた者は確信をもって待ち望んでいます。またこれは「御霊によって」とあります。キリストへの信仰に生きる生活は、イコール御霊の祝福にあずかる生活であり、その人はやがての天国の味、聖霊の味を今ここでも味わい、支えられて行くのです。律法による奴隷の生活とは全く対照的な歩みがここにはあります。

そしてパウロは 6 節でこう言います。「キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける、受けないは大事なことではなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。」ガラテヤ教会にも、割礼を受けているユダヤ人もいれば、割礼を受けていない異邦人もいました。しかしキリスト・イエスにある者たちにとって、それは取り上げるにも値しない小さな事である！古い時代においては割礼を受けているかないかは大きな違いがあることのように見られてきたかもしれませんが、キリスト・イエスにあってはそんなことはどうでも良いことである。なぜなら、キリストこそが、私たちの救いに必要なすべてを成し遂げてくださったからです。キリスト・イエスにあるということが、何よりも大事なことからです。ただ一つ大事なことは何かと言えば、それはこのキリスト・イエスへの信仰なのだと言っているのです。

しかしパウロはこの信仰のことを述べる際、「愛によって働く信仰」と言いました。ただ「信仰」とだけ言えば良いのに、あえてこんな表現をしたのは、パウロにとって「信仰」は「愛」と切っても切り離せないものだったからでしょう。パウロが宣べ伝えた「ただ信仰のみ」の立場は、しばしば誤解されました。信じるだけでいいなら、それは放縦な生活を奨励することになるのではないか、それではキリストが罪の助成者になるのではないかと。2 章 17 節にそのことが語られていました。反対者たちは、だから信仰だけではなく、良い行ないも救われるためには必要だ、と主張しました。そんな中、パウロは、良い行ないにはよらない「ただ信仰のみ」の福音を伝えました。しかしパウロが同時に主張したことは、その信仰はただそれだけにとどまらないということです。キリストへの信仰は必ず愛の行ないという実を結ぶ。ここに「愛によって働く信仰」とあります。原文のニュアンスは、この信仰は「愛を通して働く」ということです。すなわち信仰とは何もしない、動かない、静的なものではなく、働くものであり、必ず愛を通して働くものである。パウロは信仰と愛の二つが救われるために必要だと言っているわけではありません。ただ一つ大事なものは信仰です。しかし真の信仰は必ず愛を伴うのです。なぜなら信仰とはキリストへのより頼みであり、人格的結合だからです。パウロは 2 章 20 節でこう言いました。「もはや私が生きているのではなく、キリストが私の内に生きておられるのです。」信仰とはキリストの命にあずかることです。ぶどうの枝がぶどうの木につながって、木に流れている養分を受けるように、キリストご自身のいのちに生かされることです。とするなら、実を結ばない信仰が存在するはずがありません。信仰とはただキリストにあって法的に義とされるためだけのものではなく、キリストの命に生かされることです。真にキリス

トにより頼む信仰に生きる人は、必ず愛に生きる者ともなるのです。これは私たちにとって大いなるチャレンジであると共に、大いなる素晴らしい約束でもあるのです。

私たちは今日の御言葉の前に自分を振り返ってどうでしょうか。私たちも正しい福音を聞いて信じて、ガラテヤ人のように、それに付け足そうとするところがあるかもしれません。ともするとキリストの十分なみわざから目を離し、自分の良い行ないによって自分の救いを成り立たせようとする奴隷生活へ逆戻りしやすい者かもしれません。ここで語られていることは一世紀のガラテヤ人にだけ当てはまることではなく、今日の私たちにも当てはまることです。私たちは改めて自分を点検させられて、ただ一つ大事なキリストへの信仰にしっかりとどまりたいと思います。この方にこそ信仰の目を向け、私たちの心と関心を集中したいと思います。神はこのキリストの内に自由と解放の祝福を与えてくださいました。また将来の栄光を確信をもって待ち望む希望の歩みを備えてくださいました。そしてこの方に結ばれて必ず愛の実を結ぶ生活を備えてくださいました。このキリスト・イエスへの信仰にしっかりとどまって、神が備えてくださった豊かな救いの祝福に歩みたいと思います。